

# 子どもの学びと居場所づくりを目指したオンラインプログラムの実践

鈴木 あこ\*<sup>1</sup>・菅谷 克行\*<sup>1</sup>  
Email: 2011063g@vc.ibaraki.ac.jp

\*1: 茨城大学 人文社会科学部 現代社会学科

◎Key Words      オンラインプログラム,      サードプレイス,      学び支援

## 1. はじめに

本論文では、認定特定非営利法人NPOカタリバが2020年に開始したオンライン教育サービス「カタリバオンライン」にて、著者が伴走者としてボランティア活動を行ってきた内容と実践の結果を報告する。

昨年PCカンファレンス2022で著者らが発表した「コロナ禍における子どもの学びと居場所づくりを目指したオンラインプログラムの実践」<sup>(1)</sup>では、ICTを活用した完全オンラインの活動を行う上で、スタッフである「キャスト」がオンラインコミュニケーションの不足部分を補うような効果的な関わり方を行っているのではないかとこの点に着目した。スタッフによる振り返りミーティング記録データを分析することにより、スタッフが子どもの各種プログラムへの姿勢・取り組みや子どもの輝いていた点に着目して情報共有を行っていることが明らかになった。情動の伝達が困難なオンライン上のコミュニケーション<sup>(2)</sup>において、子どもたちとの信頼関係を構築するために、スタッフが子どもの肯定的な要素をピックアップしていることがわかった。

著者らがカタリバオンラインで活動を継続する中で、新たな記録データを入手した。今回は、前回の分析範囲と合わせた2022年4月から9月の半年間を見ることで、カタリバオンラインの活動や学校生活に取り組む子どもたちの様子と伴走するスタッフの姿勢がどのように変化していたか考察する。

なお、本研究におけるオンラインプログラムとは、カタリバオンラインが提供し子どもたちが参加する活動の内容及び日程のことを指し、コンピュータのプログラム・アプリケーション等を指すものではない。

## 2. カタリバオンラインの活動概要

### 2.1 カタリバオンライン及びNPOカタリバについて

カタリバオンラインは、認定特定非営利活動法人カタリバ(以下カタリバ)<sup>(3)</sup>が2020年に開始したオンライン教育サービスである。カタリバは2001年から、多様な出会いと学びの機会を届け、社会に10代の居場所と出番を作るための活動に取り組んでいる。特に貧困や被災によって生まれる「きつかけ格差」を是正する取り組みを行ってきた。2021年には、経済産業省「未来の教室」実証事業の一環としてカタリバが運営するメタバース上の居場所「room-K」を立ち上げた。<sup>(4)</sup>

### 2.2 活動内容とキャストの役割

平日の放課後の時間帯にオンライン会議システム「Zoom」でルームを開室し、運営者・キャスト・子ども

たちが入って共にプログラムに参加する。プログラムの内容は、英語、イラスト、ゲームやWebツール、ヨガ、ダンス等幅広い題材を扱っている。他にも子どもたちが自主的にプログラムを企画する時間「自主企画」も設けられており、キャストが子どもと話し合ったりやりたいことを実現するための計画・実施サポートを行っている。

運営者とキャストは、プログラム実施前後にミーティングを行う。事前ミーティングでは当日の流れを確認し、子どもたちに関する情報共有を行ったり目標を設定したりする。事後ミーティングではプログラムを振り返って意見や感想を述べる。事後ミーティングの内容は、チームコミュニケーションツール「Slack」上で毎回共有される。曜日ごとに参加するキャストのメンバーが異なるため、子どもの様子や気になる点を異なる曜日担当のキャスト間で共有することが困難である。曜日間のキャスト連携を図るため、文面での記録を行っている。

## 3. キャストの関わり方の特徴及びその変遷

### 3.1 分析方法

本章では、キャストがプログラム後に行う事後ミーティングにおいて発言された内容の記録を分析して、そこから把握できるキャストの関わり方や向き合い方の特徴を明らかにする。事後ミーティングの記録は曜日ごとにルーム管理を担当する運営者が行っている。

本研究では、運営者によって記録および「Slack」への投稿がなされたデータを対象とする。今回新たに対象に加えた期間は2022年6月～9月分であり、昨年のPCカンファレンス2022で報告した2022年4月～5月分と合わせて分析・考察する。

日付、記録者(その日の運営者)、発言者、発言内容を抽出した。発言内容については、キャスト同士でどのような情報共有が行われているのかを明確にするため、筆者らが独自にカテゴリ分けを行った。カテゴリの名称および分類基準は、表1のとおりである。新たに対象に加えたデータの中には、前回<sup>(1)</sup>のカテゴリに該当しない発言があったため、「プログラム評価(発言者不明)」「子どもからの提案」「子どもからの提案を受けた反応」の3カテゴリを新たに加えて分類した。

### 3.2 カテゴリごとの集計結果とその概要及び考察

発言内容のカテゴリ別に発言数を集計し、いつ何が多く発言されているのか、時期で内容に変化があるのか検証する。合計発言数の月別集計をグラフ化(図1)し、このグラフと各カテゴリの発言数推移を比較する。

表 1 カテゴリー名称及びその分類基準

カテゴリー	発言者	発言対象 (人・プログラム)	発言対象 (時系列)
子どもの輝いていた点	全員	子ども	当日
子どものプログラムへの姿勢・取り組み	全員	子ども	当日
子どもの近況について	全員	子ども	当日(過去数回を含む)
子どもについて心配なこと	全員	子ども	当日(過去数回を含む)
子ども同士の相互的なコミュニケーション・雰囲気	全員	子ども	当日
運営上の報告	全員	プログラム	当日
参加状況	全員	自身	以前～当日まで
キャストプログラム評価	キャスト	プログラム	以前～当日まで
実施者プログラム評価	プログラム実施者	プログラム	以前～当日まで
推察	全員	子ども	当日
反省	全員	自身	当日
感想	全員	自身	当日
対応	全員	自身	当日
対応における課題	全員	全体	今後
感謝	全員	キャスト	当日
称賛	全員	キャスト	当日
同意	全員	キャスト	当日
応答	全員	キャスト	当日
フォロー	全員	キャスト	当日
進め方の提案	全員	プログラム	今後
関わり方の提案	全員	子ども	今後
(新)プログラム評価(発言者不明)	不明	プログラム	以前～当日まで
(新)子どもからの提案	全員(子どもからの伝達)	全体	以前～当日まで
(新)子どもからの提案を受けた反応	全員	全体	以前～当日まで

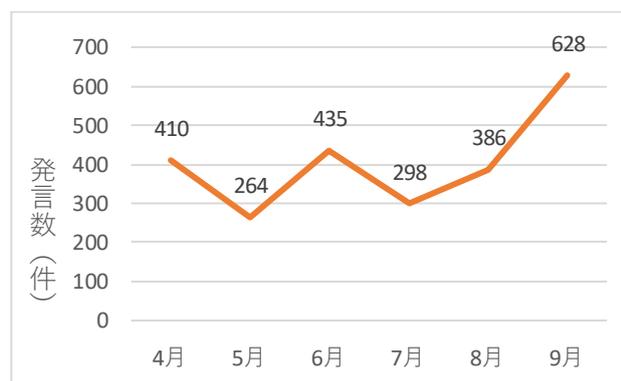


図 1 月別の合計発言数

カテゴリーごとの結果については、特徴的な傾向が現れたものみに絞り、グラフを示しながら考察を記述する。

(1) 「子どもの近況について」(図 2) :

6月が突出して多く、4月が5月よりも少ない。このカテゴリーにおける6月の発言内容を見てみると、「定期(中間)テスト」「学校行事」「疲れている」など、他の月の内容には見られなかった文言がある。4・5月は主に「はまっているもの」などマイブームに関連した近況が多かったことが共通しており、4月-5月間の増減に関する明確な理由は判明しなかった。

7月は「3連休」「夏休み」といった時期特有のキーワー

ドがあるものの、この半年間の中では最も発言数が少なかった。8月は「夏休み」の思い出やマイブームの話、9月は最近のプログラムに関する話題が見られた。

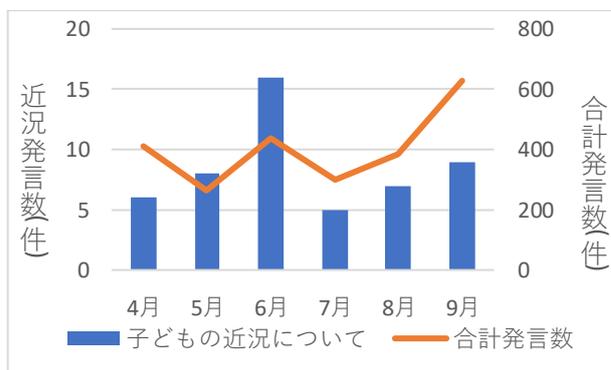


図 2 月別集計「子どもの近況について」

(2) 「子どもについて心配なこと」(図 3) :

推移の仕方が折れ線グラフ(合計発言数)と類似しているが、6月が突出して多い特徴がみられる。この要因は一人の子どもに関する発言が複数人のキャストからなされた点にあり、11件中8件が同じ日に発言されているものだった。他のカテゴリーと比較した際、どの月も発言数が多いわけではないため、全体的な傾向ではなく、一件の出来事が数値に表れる形となった。

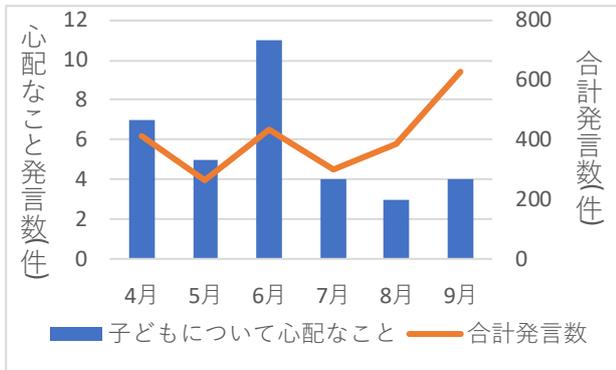


図 3 月別集計「子どもについて心配なこと」

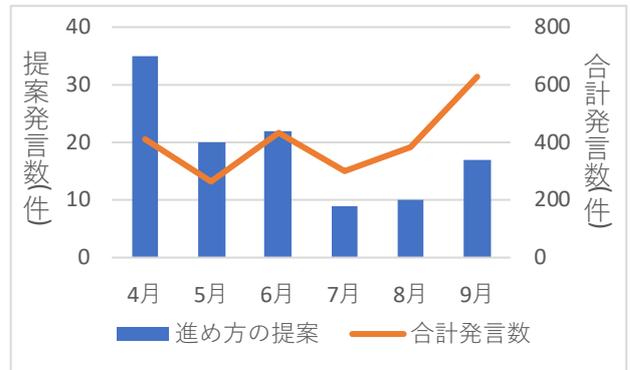


図 5 月別集計「進め方の提案」

(3) 「対応」(図 4) :

上記と同様6月が突出して多いことが特徴であり、4・5月が少ない。6月の発言内容を見ても特徴的な内容は見受けられず、発言したキャストやプログラム名にも偏りは見られなかった。比較的多かった内容を挙げるとすれば、その日の参加者や来た人数に合わせて「プログラムの内容を変更した」という趣旨の記述があり、柔軟に対応している様子が見られた。

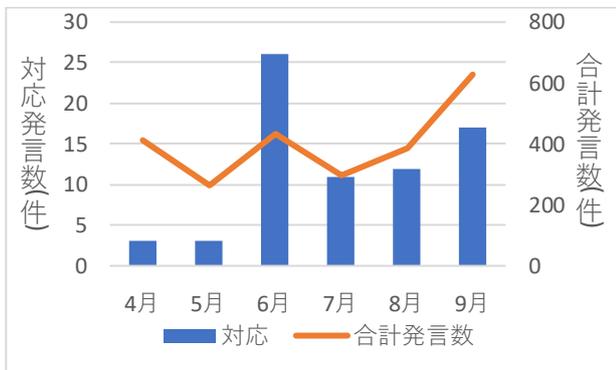


図 4 月別集計「対応」

(4) 「進め方の提案」(図 5) :

折れ線グラフ(合計発言数)と推移が類似しているが、4月が突出して多いことと9月の増加が緩やかであることが特徴である。このカテゴリーにおける4月の発言数が多い要因として、2022年4月から全体の運営方針の変更があり、プログラムの内容にも転換が起こったことが関係しているのではないかとこの予測を立てた。しかし、振り返りの中で直接言及している発言は特段多くは見られなかった。また時期的なポイントとしては、当時ロシアのウクライナ侵攻が開始されてから2カ月ほどであったことから、その情勢に配慮して進めようという提案も1件ではあるが見られた。

(5) 「関わり方の提案」(図 6) :

5月が最も多く、8月が比較的少なかったのが特徴である。5月は合計発言数が最も少なかったため、5月が発言数最多になったカテゴリーはこの「関わり方の提案」のみであった。しかし、発言を辿っても比較的通常通りの内容が多く、明確な要因は不明であった。

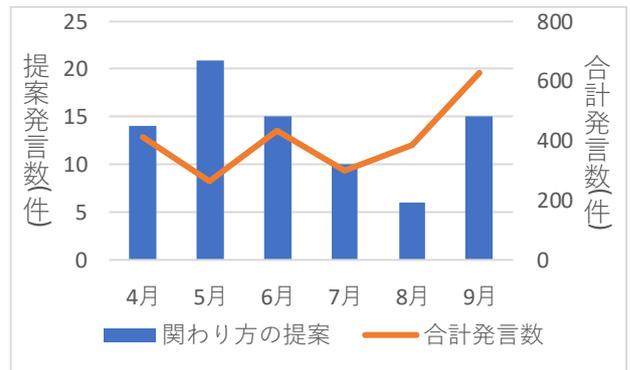


図 6 月別集計「関わり方の提案」

(6) 「反省」(図 7) :

6月-7月間の増加傾向に加え、4月が多く9月が多いといった特徴があった。発言数そのものが少ないカテゴリーのため絶対値の変化がグラフに表れやすい点に注意すべきだが、それを加味しても7月の「反省」は半数が「自主企画」に関する内容であったため、フェスウィークに向けたサポートの難しさがあったのではないかと推測できる。

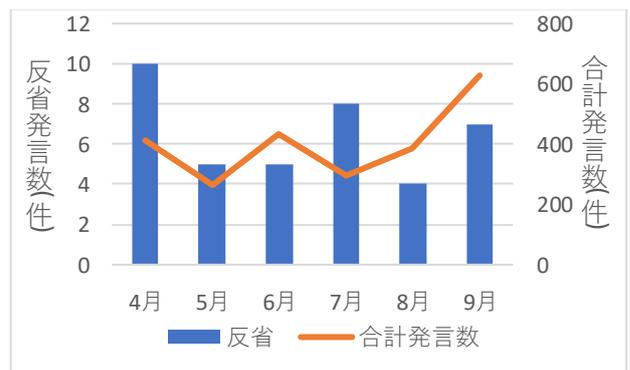


図 7 月別集計「反省」

### (7) 「称賛」(図 8) :

8月のみが突出して多く、それ以外の月は折れ線グラフ(合計発言数)通りに推移している。この要因は、子どもたちが自ら考案したプログラムを数日間にわたって実施・展開するイベント「フェスウィーク」であると考えられる。フェスウィークは長期休暇期間に合わせて実施するため普段参加が少ない子どもやキャスト・運営スタッフも参加することがあり、本部運営スタッフが久しぶりに子どもたちと顔を合わせて関わっていた姿を「称賛」する内容が多く見られた。該当の運営スタッフの参加によって多くの子どもたちがプログラムに集まったこともあり、大人数の子どもとの関わり方やこの時間の良かったことを一般化・言語化することで今後取り入れられそうな要素を検討していた。

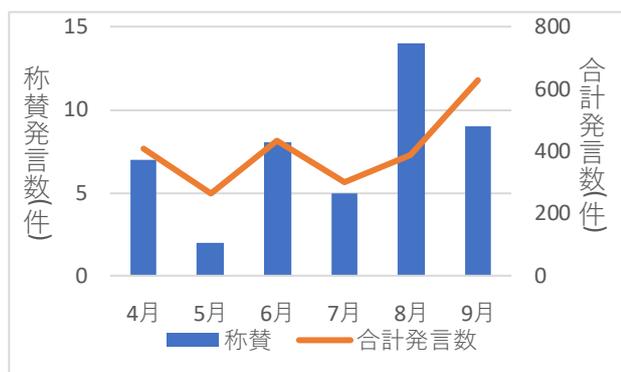


図 8 月別集計「称賛」

### (8) 「キャストプログラム評価」(図 9) :

4月が多く、他のカテゴリーと比較すると6月と9月が少ない。上記の通り、6月は子どもの様子や対応についての発言が多かったため、プログラム関連よりもそちらの方に発言が偏ったとみられる。4月の多さと9月の少なさに関する要因は不明だが、4月は「進め方の提案」でも言及した運営方針変更や年度開始に伴う変更点に言及した発言が若干数見られた。

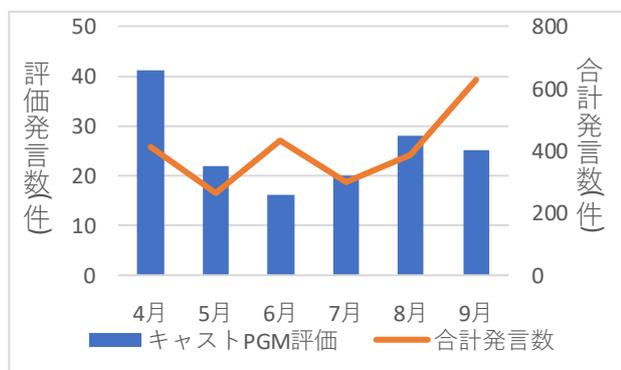


図 9 月別集計「キャストプログラム評価」

## 4. おわりに

本論文ではカタリバオンラインにおける子どもたちとの継続的な関わり方の事例を基に、サービスの在り方及び

子どもたちの様子にどのような変遷が見られたかを明らかにしようとしてきた。2022年度上半期の振り返りデータの分析を通して、特徴的な内容が多かった月は6月で、特に子どもの近況においては学校生活に関する言及が多かった。学校の環境が大きく変わる年度始めの4月よりも、徐々に生活に慣れてきたり行事に参加したりすることが子どもに強い影響を与えている可能性が見られた。

これらの結果は、今後のさらに広範囲のデータの分析を行うことで、別の年においても6月に同様の特徴が見られるのか否かについて検証していく必要があると考える。

次に、夏のイベントとして行われた「フェスウィーク」は、子どもにとってもキャストにとっても刺激と成長の場になっていたのではないかと考えられる。子どもたちはプログラムでやりたいことを自ら発信・企画し、キャストの手を借りたり子どもたち同士で協力したりして、主体的に取り組もうとする姿勢を見せていた。一方キャスト側も、子どもたちの主体性を重んじつつ適切なサポートを行うにはどうすべきか模索している様子や、フェスウィーク当日のスタッフの関わり方を称賛し学ぶ様子が見られた。

このイベントがきっかけとなり、9月以降「子どもからの提案」として、子どもたちからカタリバオンラインについての要望を直接キャストに共有する場が設けられた。それを聞いたキャストが「子どもからの提案を受けた反応」としてさらに意見を共有している。子どもたちの主体性を重んじる伴走が、集団における子どもたちの自己効力感に繋がった。それが主体性の連鎖を生み出していたのではないかと推測できる。

そして、これらの結果はオンライン環境でコミュニティ感覚が形成<sup>(5)</sup>されているのではないかと考えられる。現在のコミュニティ感覚における研究は、地政学的枠組みに限定された集団関係に限られている。<sup>(5)</sup> 地理的な条件に囚われないオンライン環境下でのコミュニティ感覚の形成は、今後ますます広がっていくものと考えられるため、コミュニティ心理学的観点からも検討の余地がある例だと言える。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの助言をいただいたNPO 法人カタリバの後藤諄様に感謝いたします。

## 参考文献

- (1) 鈴木あこ, 菅谷克行: “コロナ禍における子どもの学びと居場所づくりを目指したオンラインプログラムの実践” 2022PCカンファレンス論文集, p.71-74 (2022).
- (2) 朝日新聞「オンラインの会話 心は通じるか」2022年2月3日 朝刊 28面 東京本社
- (3) 「認定 NPO 法人カタリバ 未来は、つくれる。」 <https://www.katariba.or.jp/> (最終閲覧 2023.06.28)
- (4) 今村久美: “NPO カタリバがみんなと作った不登校親子のための教科書”, p175, ダイヤモンド社 (2023).
- (5) 植村勝彦, 高島克子, 箕口雅博, 原 裕視, 久田満 “よくわかるコミュニティ心理学[第3版]”, pp58-61, ミネルヴァ書房 (2017)